

やま ぐち

山口遺跡

- 1 所在地 薩摩川内市都町^{みやこまち}
- 2 起因事業 南九州西回り自動車道
川内隈之城道路建設
- 3 調査年度 (発掘調査) 平成21～23年度
(整理作業) 平成23～24年度
- 4 主な時代 旧石器時代～縄文時代草創期・
早期・後期・晩期, 弥生時代～
近世
- 5 遺跡の概要

山口遺跡は、薩摩川内市都町に所在し、川内川の支流(木場谷川・都川)に挟まれた比高差30mの舌状台地にあります。現在の西回り自動車道の都インター近くです。



縄文時代の土器



6 調査の成果

山口遺跡では、細石刃期^{さいせきじん}から縄文草創期^{そうそうき}(約15,000～14,000年前)の細石刃製作に伴う上牛鼻産^{かみうしばな}や霧島系黒曜石^{こくようせき}の石器製作跡や、落とし穴状遺構、土坑^{どこう}、礫群^{れきぐん}が検出されました。縄文時代早期(約7,800年前)においては、深鉢^{ふかばち}の口縁部が「く」の字に屈曲する特異な塞ノ神式土器^{せのかん}が出土したのが注目されます。また、打製石鏃^{うかが}などの石器の製作跡や落とし穴状遺構、土坑、集石遺構なども検出され、細石刃期から縄文時代まで、狩猟生活をしてきた様子が窺えます。

中世においては、掘立柱建物跡^{ほったてばしらたてものあと}を中心に、墓跡、土坑がセット関係で4つのエリアに集中して検出されました。初代の先祖を守り神として家の敷地内に祀る「屋敷墓^{まつ}」をもつ屋敷群^{もつかんぼ}が、複数存在した可能性が分かります。同じ時期に、木棺墓^{もくかんぼ}や石塔墓^{せきとうぼ}、墓の上に屋根を設けるタイプなど、4つとも異なる形態で埋葬していたことが分かり、他に類例を見ない珍しい様相^{ようそう}が見えてきました。



中世の建物の柱跡